

## COVID-19 対応と今後の課題について

富山大学附属病院 検査・輸血細胞治療部

森田 未香

この原稿を執筆中の 2021 年 11 月上旬は、新型コロナウイルスの第 5 波の流行も落ち着き、日常生活での緊張感も少しだけ和らいだ様に感じます。

当院の検査室では、COVID-19 対応を 2020 年 3 月上旬より開始し、検体取扱い手順の整備、患者との接触がある生理検査での感染対策、PCR 検査体制の構築の 3 つを中心に対応しました。

まず検体の取扱いは、採血・尿検体等の提出方法の検査前プロセスから、受付・分注・測定 of 検査プロセス、検体保管検査後から検査後プロセスまでについて、感染形式の特性を考慮に入れて手順を作成し、周知を行いました。

生理検査室での感染対策は、心電図検査、超音波検査、脳波検査、肺機能検査のそれぞれの検査について、検体検査と同様に全てのプロセスの感染対策をマニュアル化し、実施しました。その内容は、発熱等の症状の確認、個人防護具の着用、手指消毒、患者が触れた箇所の消毒、シーツ等のディスポ化です。これらのマニュアル作成や、個人防護具の着脱方法のトレーニング、手指消毒剤の個人持ちを開始などの事柄は、生理検査担当の技師が自ら率先して行ってきました。今まで院内感染対策委員会で活動してきたなかで、臨床検査技師の感染制御に関する意識が、他の職種と比べて高いとは思えない状況と感じていました。この度の感染流行により変化が認められた事は喜ばしい事で、今後も継続していくべきと考えます。

そして、PCR 検査については発熱等の有症状者の診断、手術前・産前スクリーニング目的

として 5 月中旬より検査を開始しました。その後、夜間・休日においても PCR 検査を行う体制も整え、時間外検査担当者が実施する事となりました。この体制を整えるには、検査環境の整備で時間を要したため、臨床からの要望に早急に応えることができず、その点は反省すべきと感じています。

当院の臨床検査技師は、検査に対する対応のみならず、富山大学のワクチン職域接種で打ち手として学生・教職員の接種に関与しました。日本臨床衛生検査技師会主催の Web 講習会の視聴、感染症科医師による実技講習を経て、接種者となりました。採血業務とはまた違う対応に、当初は戸惑い苦勞をしましたが、その分多くの学生にワクチンを接種することで、富山県内の感染制御に貢献できたと感じています。

コロナ前、日本の検査室における、遺伝子検査機器の導入は世界と比べ決して十分な状態ではありませんでした。今回の感染症流行により多くの機器が検査室へ配備されたことは良い影響だと考えますが、アフターコロナを見据えて、今回導入に至った機器の活用方法を検討していかななくてはなりません。

個人防護具や、検体輸送に伴う容器、またスワブ、スピッツ、チップ等の検査に関する消耗品の不足への対応も重要で、在庫の管理、物品調達ルート of 複数化等の備えが必要と実感しています。

今後、同じような感染症の大規模な流行があった場合は、臨床の現場に即した検査を実施する体制を早急に構築するために、遺伝子検査室以外の人員においても、日常の研究を通

して遺伝子検査に関する技術の習得が必要と  
考えます。また、それぞれの検査分野において、  
感染制御の視点を持って手順を構築できるよ  
うな人材教育が必須だと感じています。